

断言した。

そのために部落から追放される結果となったが、そんな事に驚いてはいられなかった。

昭和30年に餌付けを志し、34年の12月に成功。以来苦しい生活の中から私費を投じて餌を購入し続け今日に至ったのである。寒風の中に立ち、海岸をさまよひ歩き、馬鹿者よ、狂者と罵られつつ。

38年にICBPの加盟国会議が日本で開かれた折りに、小湊の白鳥を見ることを希望された方々もおられたとか、しかし、時間の関係もあり釧路のツルに負けた。

私が餌付けを志した昭和30年当時、浅所小学校の当時の斉藤校長先生が私とともに白鳥保護に専心されて観察班を編成した。現在の観察班の前身であり、創始者の功績は大であるのに、今は誰もそのことを口にする者はない。甚だ遺憾である。

30年頃から34・5年頃まで、私の記録が浅所小学校の観察班に行っているが、その後は独自で行なっている。

一口に30年といっても永いものであった。しかし、健在である限り、保護観察を今後も続けるであろう。

## 強 靱 さ の 証 明

### ある白鳥家族の軌跡

本 田 清

今川文暁師が、私に書き与えてくださったことばに「魚に非ざれば魚の心は知らず、鳥に非ざれば鳥の跡を尋ねがたし。」というのがある。

過去20年間、あくこともなく白鳥を追い求めてきた私も、魚の心を理解するなどということは論外としても、白鳥の日常的な行動さえ実際にはなかなかつかみにくいことであった。

同志相ばかり日本白鳥の会を結成して5年、渡来シーズン中、毎月定時定点調査を実施し、全国数十カ所に及ぶ各渡来地での白鳥の様子もある程度はわかってきたが、これはごく微視的な点と点のなかの概況に過ぎず、最も知りたかった点から点までの行動の実態は、実のところ全くわからなかった。

しかし、IWRB（国際水禽調査局）方式による白鳥の首輪標識調査が普及してくるにしたがって全くあからさまに具体的な事実がわかりはじめてきた。

たとえば、これまで白鳥の家族の結束は固いとか、グループごとに行動をともにし、毎年同じ渡来地にやってくるとかいわれていたが、首輪標識調査による過去3シーズンのデータから見ると、必ずしも全部がそうではないことがわかってきた。そこで、ここに二つの白鳥家族の例をあげる。

1974年8月、ソ連の調査隊によってシベリヤのチュコト半島の営巣地で、巣立ち直前に着標された二腹の幼鳥は、10月はじめに南下したときには、それぞれ親鳥2羽、幼鳥5羽からなる二つのファミリーであった。

まず、A群の幼鳥5羽のうち4羽は、親鳥と思われる成鳥2羽とともに76年10月25日クッチャ

